岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

102
SPRING
2025

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

子の所縁

特任館長　榊原　悟

他愛もない質問で始めたい。

弁財天に恵比寿、大黒、毘沙門天、布袋に寿老に福禄寿。彼らを七福神と呼ぶが、さて、この中で人びとから最も敬愛されているのは誰か。

唯一の女性神たる、別嬪の弁天さんこそ一番。いや、それを云うなら商売繁昌十日夷のエベッさんこそと、喧喧囂囂、埒もない。そこでこんな川柳はどうだろう。

◇

弁天を大黒にし又布袋にし　『誹諧柳多留』一〇六編

◇

弁財天、大黒天、布袋、三福神の名を単に列記しただけではないか。これで意味をなすのか、訝る読者がいるかも知れない。だがその心配はご無用。

弁天が布袋に替る御めでたさ　前掲書　三七編

大黒が欠席しても意は通る。ただし大黒を飛ばしては、多少問題が生じる布袋もあるのかも。だが、いずれにせよ、大江戸人士は、一読了解、ニヤリとしたはずだ。それもこれも七福神のご利益か。いや、それもあるかも知れないが、それだけではあるまい。人びとが、三福神の人となり、ならぬ神となりや、その姿かたち、属性について承知していたからで、つまり七福神こそは、それだけ大江戸人士に親しみ深い存在であった、というのだろう。

いや、ほかの福神も含め七福神は、そもそも、茶化しの対象として取上げられる頻度が高い。川柳、戯画界のスターだ。そんな川柳の中には、下ネタに及ぶバレ句も多く、ここでは公開を憚らざるを得ないのが心苦しく無念だが、興味の向きは『誹諧柳多留』を丹念に繙かれたい。

となると弁天、大黒、布袋の三福神だけが特別に支持されたとは云えないようで、ましてや七福神の人気順を決めるなど、それこそ罰当たりも甚だしい。とは云え大黒さまだけはやはり別格、最も敬愛され親しまれた福徳神ではなかったか。「大黒柱」「大黒さん」の語があるではないか。家屋の屋台骨を支える柱のうち最も太く頑丈なそれを「大黒柱」、一山一寺の家事一切を切り盛りし、経営を支える住職（坊主）の妻を「大黒さん」と呼ぶ。厨（台所）の守護神として祀られたのも大黒、神仏習合から国造りの神大国主命と同一視されたのも大黒であった。

幕末のことではあるが、斎藤月岑（一八〇四～七八）の『東都歳時記』（天保九年・一八三八刊）には、江戸で大黒天（大国主命）を祀る十二ヶ寺を列記、そのうちの一つ、伝通院の子院・福聚院では、大黒さんの縁日・甲子の日には、ご開帳もあり、参詣群集したという（同書巻之一春之部）。大黒天信仰と人気の広がりが分かろうと云うものだが、信仰したのは、必ずしも庶民に限るわけではなかったようで、どうやら我らが家康公（一五四二～一六一六）にも、それがあったらしい。

◇

「伊予札黒糸威胴丸具足」（図1、久能山東照宮博物館蔵）通称「歯朶具足」。この名を聞けば、少なからぬ人は得心がいったはずだ。そう、家康が夢に大黒天を見て、奈良の甲冑師岩井与左衛門に作らせたのが、これだと云うからだ。確かにその甲は大黒頭巾形ではないか。家康は関ケ原の合戦でこれを着用したともいう。開運招福の神・大黒天、しかも国造りの大国主命とも同一視されたとあってみれば、こと天下分け目の大戦に臨んで、その霊力を恃まんと、これを着用するのは当然。しかしその甲斐もあってか、家康は勝利した。そんな霊験あればこそか、後に三代将軍家光（一六〇四～五一）は久能山からこの甲冑を江戸城に取寄せ、将軍家の武器筆頭に位置付けた。四代家綱（一六四一～八〇）以降は歴代この甲冑の写しを作り、正月の具足祝いで床に飾ったと伝える。

◇

面白いのは「霊夢像」と呼ばれる「徳川家康像（東照大権現像）」（日光山輪王寺蔵ほか）である。家光が夢に見た家康の姿を、狩野探幽（一六〇二～七四）に語り、描かしめたことから、こう呼ばれる。日光山輪王寺本八幅のほか徳川記念財団、国立歴史民俗博物館に所蔵される。見逃し難いのは平服姿で描かれた七幅で、そのうちの実に三幅までが大黒頭巾を被っている点である。その姿で夢に現れたのである。むろん、これには家康所用の「歯朶具足」の甲が大黒頭巾形であることを知った、家光の眼の記憶が作用したに違いない。だが、それより何より、実際に家光が目にすることができた家康が（その機会は思いのほか少なかったはず）、少なからずこの大黒頭巾姿であったのだろう。

その家康に、家光は大黒天の姿を見た。いや、家光だけではない。当の家康自身自ら大黒天に、少なくとも「歯朶具足」を着して臨んだ関ケ原では、そう準えていたのではなかったか。

その家康が描いた「大黒天図」が伝わる（徳川記念財団蔵）。頭巾を被り、右手に打出の小槌、左肩に袋を担ぐ。通例の大黒天像である。あるいは家康が夢に見たという大黒天もこんな姿ではなかったか。気になるのは骨格がっしりした、

図1　「大黒頭巾形兜」（久能山東照宮博物館蔵）

野の人を思わせるその顔が、どこか家康その人を思わせる点である。しからば大黒に準えた自画像？いや〳〵、それこそわたしの夢想ならぬ初夢に過ぎないとしておこう。

そこでもう一つ、大黒天の話題を提供してみたい。幕末の西尾藩々主・松平乗全（一七九四～一八七〇）の「大黒天図」についてである。乗全は、言うまでもなく譜代の名門・大給松平家第十四代。開国か攘夷かで揺れる幕末、老中に二度までも着いた。享保十六年（一七三一）来日した清の画人沈南蘋（一六八二～？）風の花鳥画をよくする殿さまとしても著名。遺例も多い（神谷浩「特論四　殿さまの絵画　乗完から乗全へ」『新編西尾市史』別編一美術工芸・建造物　二〇二四年）。

◇　◇

その乗全、如何なる理由か「大黒天図」を複数描いている。架蔵本に加え、その封地であった西尾市刊行の図録類から拾うと、次の三図を数える（これ以外にもう一図報告されているが、右手に持つべき打出の小槌を左手にしているなど不明な点もあるため、今回は省いた。市制四十五周年記念特別展「大給松平氏と西尾藩」図録　西尾市資料館　一九九八年）。

①「大黒天図」（図2）
賛　「七難即滅　七福即生」
落款「甲寅初秋甲子（嘉永七年・一八五四　七月二十七日）
西尾侍従筆印印」
盛巌寺蔵（前掲『新編西尾市史』別編一所載）

②「正面大黒天図」（図3）
落款「庚申晩秋甲子（万延元年・一八六〇　八月）
謙斎画印」
「西尾城主大給松平の書状と書画」展図録（西尾市資料館　二〇〇八年）所載

③「正面大黒天図」
落款「行年七十一（元治元年甲子歳・一八六四）謙翁筆印」
架蔵

正面、側面の違いがあるものの、いずれも大黒頭巾を被り、右手に打出の小槌左肩に袋を担いだ定型の大黒天像。お手本があったのだろう。①②の材質については報告がなく不明だが、③の絵絹は目の詰んだ高級品、いかにもお大名の作らしい。

もとより各図それぞれ制作に至る動機があったに違いない。例えば①。寛政六年（一七九四）甲寅の歳生まれ乗全は、嘉永七年はまさしく還暦。制作の動機はそれを祝うところにあったとも云えそうだが、それにしても、十二月九日生まれの乗全が初秋甲子＝九月の揮毫では何か釈然としない。もっとも数え年が普通の当時にあっては、誕生日自体の持つ意味は軽く、しかも還暦と云うのなら、年が改まったとたん、それを迎えるわけで、そのための揮毫ならば、以後、年内いつでも可になるのだが…。

そこで改めて落款を見てみたい。①②は日付が甲子とある。③には日付の記載そのものがないが、揮毫したのが七十一歳の年だから元治元年、まさしく甲子歳である。つまり日、歳の違いはあるものの、三点いずれも甲子の所縁につながる作であったのだ。だが、そうであればこそ、描いたのが大黒天。開運招福を願っての制作とみれば、それで一件落着。

だが本当にそれだけか。制作には、さらに具体的動機があったように思われてならない。それを考える手掛りも、また干支の甲子にあった。云うまでもない、甲と子は、その干支、十干、十二支のそれぞれ一番目。つまり甲子は、そこから新しい暦が始まる、その最初である。還暦が尊ばれ、祝われるのも、もちろんそれが長寿の謂であるからだが、さらにその年に、生まれた歳の干支に戻るからである。還暦に本卦帰りの別名があるのも、それ故だ。そこから新たな暦、新たな人生が始まる。その伝でいけば、甲子の歳は、言わば暦自体の還暦ではなかったか。

注目すべきは、その甲子と辛酉の歳とに元号を改める改元のならわしがあった点である。辛酉革命と甲子革令と云う。陰陽五行説に基づく中国古代の予言たる「讖緯説」によれば、この二つの年には革命（天命を改める、王朝が交代する）や変事・争乱がおこるとされた。この教えを知った文章博士三善清行（八四七～九一八）が、時の帝醍醐（八八五～九三〇）に奏聞、年号が延喜（九〇一）に改められた。辛酉（革命）改元の始まりである。さらにそれから六十年を経、村上帝（九二六～九六七）の代に至るや、応和元年（九六一）の辛酉改元に続き、その三年後の甲子の歳（九六四）にも改元が行われ、康保となった（甲子革令）。以後、幕末孝明天皇（一八三一～六六）の文久元年（辛酉・一八六一）と元治元年（甲子・一八六四）に至るまで、わずかな例外（正親町天皇の辛酉・甲子の歳＝永禄四・七年および後水尾天皇の辛酉の歳・元和七年）をのぞいて、辛酉と甲子の歳には、たった三年を隔てるだけなのに、必ず改元があった。むろん、これによって革命、争乱、変事を避けるためである。しかし、それを契機に安寧の世が始まる。更生を図り、心機一転を期す。辛酉・甲子の干支には、そんな意味があったのだ。だが、そう考えてみれば、乗全「大黒天図」制作の動機も見えてくるのではないか。

それにつけても、辛酉改元どころか、即位後の代始改元も大嘗祭さえ実施できなかった後水尾天皇（一五九六～一六八〇）の心中は如何ばかりであっただろうか。天皇自身が故実に通じていただけに、口惜しさ無念さは尋常ではなかったはずだ。暦の分析からは、そんな天皇の心中も分かる。歴史を語るに暦の知識がなければ心許ない、と云うところか（続く）。

図2
「大黒天図」（盛巌寺蔵）
画像提供：西尾市教育委員会

図3
松平乗全「正面大黒天図」
（西尾市教育委員会蔵）

新収蔵品紹介

深見佐兵衛家資料　染織品

安本　翔音

美術館・博物館の活動の一つとして、作品・資料の収集というものがあります。当館においても、毎年、収集活動を行っております。ただし、一概に収集といっても、寄附（寄贈）・寄託・購入の三種類があり、市民の皆様からのお声がけから収蔵されるものや、当館から自発的に集めるものがあります。また、なんでも受け入れるというわけでもなく、毎年、年末から年度末ごろに受け入れについて、外部の専門家の先生方に可否を諮る「収集委員会」を開催しています。本稿では、今年度の受け入れ資料の一つとして、「深見佐兵衛家資料」を紹介したいと思います。

◇　◇

今回紹介するのは江戸時代に現在の岡崎市新堀町にて、三河木綿商であった深見佐兵衛家で実際に使われていた染織の資料群です。深見佐兵衛家は木綿仲買商・金融などで発展した家である一方、特に近世後期、深見家当主であった三笑（一七七三―一八三五／深見佐兵衛家の当主で、天明期狂歌地方随一の判者）は滝沢馬琴や太田南畝らの江戸の文人との交流もあったとされ、三河でも有力な商家で文学にも精通した家でもありました。そのため、当時の庶民にとっては上質な染織品を使用していたといえます。

深見佐兵衛家の資料についてはこれまでも古文書等を度々受け入れておりますが、ここにあらたに染織品をご寄贈いただきました。

◇　◇

今回受け入れた資料の内訳をみていくと、染織品四二件とその他、髪飾りなどの小物四件、合わせて四六件となります。そのうち、江戸時代後期から大正期にいたる着物が多く、子供用のものや三河木綿の着物、布団のほか、先述の朝倉庵三笑所用の着物なども含まれます。ここでは、そのうち三点を紹介いたします。

・朝倉庵三笑所用の着物（写真①）

こちらは黄八丈のものと考えられます。黄八丈とは、黄色の地に、茶、とび色の縞柄のある、糸織の絹織物です。近世においては大名や御殿女中に愛好され、後期に至ると、人形浄瑠璃の「恋娘昔八丈」上演によって、町人の間でも流行るようになり、明治時代に入ると下町の女性の象徴ともなりました。

・半襦袢（写真②）

襦袢とは、現在でいう肌着のことです。こちらは、一度使われた素材を再利用して、また新たに仕立てられたもので、近世中期以降、このように複数の布を用いた華麗な襦袢が流行りました。使われたものも使えなくなるまで使うという、当時の染織品のライフサイクルを見ることのできるものとして興味深いものでもあります。

・衣服雛形（写真③）

こちら裄十九．五cm、丈四十一．〇cmの小さな着物です。もちろんこちらは着るためのものではありません。明治に入り、学校教育で教えるために考案されたもので、着物を仕立てるための練習用として作られたものです。当館では受入が少なく貴重なものです。

◇

近世・近現代の庶民の染織品は、生活品であることから残らないことが多いですが、本資料群はまとまったものであり、当時の三河の人々の風俗を垣間見ることができるという点で貴重です。

今後、近世以降の三河木綿商資料として活用を図っていきたいと思います。

写真①　着物

写真②　半襦袢

写真③　衣服雛形

新収蔵品紹介

今泉　岳大

当館では今年度の新たに収集した美術資料として、地域の作家である国島征二の作品三点を購入、企画展で借用した鬼頭健吾の作品四点の寄附を受け入れ収蔵品に追加した。

国島征二は一九九四年から岡崎市夏山町（旧額田郡夏山町）に居を構え、制作活動をおこなった美術作家である。七〇年代からアメリカを拠点に活動し、日本とアメリカ、世界各地で作品を発表してきた。パブリック彫刻の作家として知られ、ロサンゼルス国際空港に設置された《Stacking Stone》（一九八三年）をはじめ、岡崎市内にも《石の風景〝岡崎からの…〟》（一九八四年）などがあり、世界的に活躍した郷土の作家であると位置付けることができる。当館は国島が継続的に展開してきた「Wrapped Memory」シリーズ三〇点、アルミの積層《A・C-7A 08-5》一点、《FUKURO》と題された立体二種三点を収蔵している。

今回購入した《SEALED TIME MY TIME – CUTOFF》（fig.1）は国島が一九七二年頃から素材として使用したアルミニウム合金による作品であるが、国島が長年展開したアルミの積層シリーズとは異なり、二層に分かれた箱のような形状の中に、文字盤をはじめとする時計の部品が配されている特殊な作品である。《SEALED TIME MY TIME – CUTOFF》は翻訳すると「封印した私の時間―遮断」となる。本作は国島の作品における層の概念には時間の要素を含むことを示唆するものである。

彫刻《Suspended Pool'82-19》（fig.2）は左右二つに分かれた台座の窪みに、半円形の石が設置されている。絵画《Suspended Pool》（fig.3）は背景となっているふたつの黒い色面の前面に、青い半円形のオブジェクトの輪郭線が二つ重なり動的に描かれている。彫刻と絵画ともに半円形のオブジェクトが作品の中心になっている点で共通している。「Suspended Pool」は翻訳すれば「浮遊したプール」となるだろうか。本作はプールに見立てた半円形のオブジェが浮遊するイメージの連作であると考えられる。これは国島の作品のテーマである「内と外」や「層」の考察するための重要な作品である。

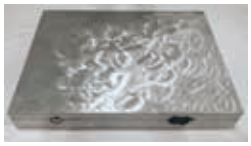

fig.1 国島征二《SEALED TIME MY TIME – CUTOFF》1975 年、49.0 × 35.0 × 70.0 cm

fig.2 国島征二《Suspended Pool'82-19》1982 年、16.5 × 44.0 × 14.5 cm

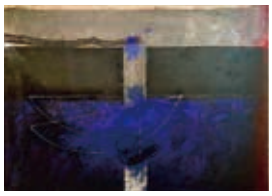

fig.3 国島征二《Suspended Pool》1991 年、95.0 × 132.0 cm

fig.1 上蓋を開いた中身

鬼頭健吾は名古屋出身の国内外で活躍する美術作家である。フラフープやシャンプーボトルなど、工業製品の現代的なカラフルさと、生命体や宇宙を感じさせるような広がりを融合させた作品を展開する。今回寄附を受入れた四点は絵画三点と立体一点である。

《ex-utopia》(fig.4) は油彩の色面構成による絵画であるが、塗りムラが強調され、キャンバスの支持体への貼り方も微妙にずれている。また画面には絵具の滴った跡があり、無機質な画面に敢えて手仕事であることを強調する揺れを表現している。

工業製品を用いたインスタレーションのイメージが強い鬼頭だが、制作のベースにあるのは絵画であり、インスタレーションは今回の寄附にも含まれる「cartwheel galaxy」シリーズに見られるような抽象的で平面的な世界の拡張を標榜するものである。《cartwheel galaxy》（表紙／fig.5）は鬼頭による絵画が成し得る絵画特有の世界観を追求するシリーズで、クシ状のスキージを用いて、画面に円形、つまり「cartwheel（車輪）」を描き、その轍が自由に画面を走るように描く。本作はラメを取り入れた物質性／装飾性の強い画材で描かれており、線や色が複雑に折り重なっている。そして鬼頭は複雑化した絵画世界を拡張させるように立体へ展開する。

《orion》(fig.6) はロードバイクのドロップハンドルを連結した立体作品である。鬼頭はドイツに滞在していたことがあり、街中で多くの人々が使用している自転車に着目して制作したという。本作は工業製品を用いて絵画世界を拡張する鬼頭の方法を端的に示すものである。鬼頭が追求するのは「どこまでいっても表面しかありえない世界」である。

以上の新収蔵品を今後の展示活動や研究に役立てたい。

fig.4 鬼頭健吾《ex-utopia》2014 年、163.0 × 103.7 cm

fig.5 鬼頭健吾《cartwheel galaxy》2022 年、直径 70.0 cm

fig.6 鬼頭健吾《orion》2017 年、162.0 × 152.0 × 32.0 cm

江戸時代の事件簿

山下 葵

CASE 4

〈承前〉

ちのはこれまでに三度の盗みをした。三度目の盗みでは、再犯の規定により死刑の量刑となったが、まだ若者であるということを理由にして、死刑は許された。

許される斬首

ちのが史料上に再度登場するのは文化二年（一八〇五）である。ちのはこの時二十九歳。盗みをしようと武家屋敷に忍び込んだところ、盗みを完遂する前に捕縛された。これが四回目の犯罪、再三犯である。文化二年の『口書』にその記録がある。刑法方の僉議に関する部分のみ次に抜粋する[1]。

文化二年四月七日
右之通、致口書候付、左之通及僉議如例相達
今日及其達候事
白石清兵衛自筆
此ちの儀、罪状口書之通御座候、①窃盗再々犯ニ而死刑被処笞之処被宥百笞之刑被仰付候処、今以改心ニ至り不申、猶又窃盗之造意ニ而御家中屋敷忍入候段、不届之至ニ御座候、此節再三犯ニ而造意不軽事ニ候得共、②品物盗取候儀ハ無之、因而別紙伊三右衛門例ニ就、加等ニ茂可相成処、女之事ニ付外仕方無之重畳被宥、前条百笞之刑ニ可被処哉、如何程ニ可有御座哉
同人付紙
本行之通僉議仕候処、③猶又被宥候儀如何程ニ可有之哉、今一応申談候様被仰聞、④例等茂重畳吟味仕候得共ハ相当之儀相見不申候、りか儀死刑被仰付候例ニ就可申哉之処、⑤りかハ度毎ニ盗いたし、ちの儀茂盗いたし候ハ、前議之通被宥候儀少茂無之候得共、未得盗よりて夫たけ軽相見申候、……（後略）

ちのは再々犯の際に死刑を許され百笞に処された。にもかかわらず、今回も窃盗をする意志をもって御家中の屋敷に忍び込んだことは不届きの至りであり、再三犯で悪事をくわだてることは軽くはない事態であるとしている（傍線①）。しかしながら、今回の盗みは未遂で終わっていることを考慮している（傍線⑤）。「伊三右衛門」の判例を参酌すると、前回の刑罰よりは加等すべきだが、女性であるため百笞より加等する方法がなく、今回も百笞とする、という方針を示した（傍線②）。

僉議のなかで、今回も許すのはいかがなものかという意見も出たようである（傍線③）。判例を何度も吟味したが、ちのの事案に一致する判例はなく、類似の判例である「りか」という女性の判例が参照された（傍線④）。りかは複数回の盗みで死刑が執行されたようであるが、りかは捕まるごとに盗みを完遂しており、今回のちのは盗みの未遂であるため、りかと同等に扱うには、今回のちのの罪状は軽いとしている（傍線⑤）。このような僉議を経て、最終的にちのは当初の予定どおり百笞となった。

本件は複数の判例を参考にして僉議を行っており、刑法方が死刑を決定することへ慎重な姿勢をとっていることがよくわかる事例である。

最後の盗み

九年後の文化十一年（一八一四）、ちのは再び窃盗により捕縛される。僉議の結果、斬首が決定していた。しかし、この年は公儀から「二等減助命」の通達、すなわち恩赦があったため斬首は執行されず、死刑を除いて女性に科すことができる最高刑の百笞となった[2]。

最後の盗みは、文政六年（一八二三）、ちのは四十八歳で、実に六回目の盗みである[3]。様々な理由で宥免措置を受けてきたちのであるが、再五犯でついに斬首が執行された。

ちのは最後の盗みでの供述で「私儀暮方兼而難渋仕候処ゟ又々盗心差発」と述べている。暮らしが以前から厳しかったため、再び「盗心」が芽生えて盗みを行ったということである。

以上、ちのという女性の一連の窃盗について検討してきた。その裁きの中で参照された判例や、ちのの判例が別の裁きに与えた影響など、より詳しい検討の余地は多分に残されているが、それは別の機会に譲りたい。

ちのは、幼年者・女性・物貰い身分という、裁きにおいて特別な措置を受ける要素を複数もつ人物であった。初犯から再犯、再々犯までの犯罪は、十代のときの犯罪であり、幼年者であることが減刑理由となっていた。幼年者は贖刑とする規定であるが、物貰いであるちのの支払い能力を考慮して、叱刑や笞刑を運用することで実現可能な処罰を執行している。再三犯では複数の判例を突き合わせて整合性をとったうえで死刑をできるだけ回避したい刑法方の姿勢もみてとれた。熊本藩では刑法草書という絶対的な法に基づきながらも、現実に即して、判例を参照しながら裁きを行っていた。

法律を読むだけではわからないお裁きの実態をみることができる。それが江戸時代の事件簿を紐解く醍醐味である。

1 『口書　文化二年』（熊本大学附属図書館寄託永青文庫資料）所収、資料請求番号 一三・一六・八
2 『口書　文化十一年』（熊本大学附属図書館寄託永青文庫資料）所収、資料請求番号 一三・一七・六
3 『誅伐帳』（熊本大学附属図書館寄託永青文庫資料）所収、資料請求番号 一三・一〇・七

シュルレアリストの声 —La Voix des surréalistes vol.2

写真の魔力

田中 裕紀乃

ここに、魅力的で不可思議な1枚の写真がある。《思考に対する物質の優位性》(fig.1)というタイトルが付されたこの作品は、マン・レイによるもので、平成十二年から当館のコレクションに加わっている。マン・レイは291画廊[1]を開廊し、写真家でもあったアルフレッド・スティーグリッツの影響で写真を始めた。本格的に写真に取り組んだのは一九一五年頃で、ダニエル画廊での初個展を開いた際、自身の作品を写真に収めた。一九二一年にパリに移った後は、モード写真を手掛け始め、その後ポートレートにも取り組んだ。マン・レイのポートレートは被写体である本人でさえ知り得なかった本質を捉えるとして評判を呼んだ。彼は多くの芸術家や著名人たちからポートレートの撮影を求められ、写真は彼が生計を立てるのに大いに役立った。当館は《アンドレ・ブルトンの肖像》(fig.2)や、《パブロ・ピカソの肖像》(fig.3)などこの時代のマン・レイの記念碑的なポートレートをいくつか所蔵している。

fig.1 マン・レイ《思考に対する物質の優位性》1932/76 年以降
©MAN RAY 2015 TRUST/ADAGP,Paris&JASPAR,Tokyo,2025 BO880

さて、《思考に対する物質の優位性》(fig.1)に話を戻そう。ここでは、裸婦が床に横臥している。モデルは目を伏せ、片方の乳房を手で覆い、もう片方の手は振り上げ片膝を立てている。そして彼女は頭部や身体の周りから床にその一部が溶け出しているかのように演出されている。

fig.2 マン・レイ《アンドレ・ブルトンの肖像》1930 頃 /76 年以降

fig.3 マン・レイ《パブロ・ピカソの肖像》1932/76 年以降
©2025-Succession Pablo Picasso-BCF(JAPAN)

本作にはソラリゼーション[2]というマン・レイ独自の技法が施されている。「ソラリゼーション」という名称はマン・レイが命名したもので、写真を現像するときに短時間ネガを再露光することで、元は黒く仕上がる部分が白く反転し、被写体の周りに縁取りのような影やベールを形成する現象を意図的に施す技法である。マン・レイがこの技法を発見したのは一九二九年頃で、あるアクシデントがきっかけだった。当時の助手であったリー・ミラーと写真を現像しようとしていた際、暗室でネズミのようなにかがリーの足元を這ったので、彼女は驚いて電気をつけてしまった。その時に現像タンクから取り出されたのが、黒い部分と白い部分が反転した、ソラリゼーションの写真であった。マン・レイはこの技法をヌード写真に多く用いた。マン・レイのソラリゼーションは物質のリアリティを曖昧にし、シュルレアリストたちが模索した現実を乗りこえる手段のひとつであった。

はっきりとしないが、本作のモデルはおそらくシュルレアリストのメレット・オッペンハイム[3]であろう。本作のタイトルは唯物論的思考を示唆している。ここでは思考は性的物質(ヌード)と対置されている。思考をつかさどる頭部が床に溶け出しているのに対し、性的物質である体躯はその形を保つことでその優位性を示していると考えられる。

本作では、ソラリゼーションの効果が被写体のアイデンティティを曖昧にし、写真に幻想性を付与している。被写体は限りなく個を削がれ、モデルを特定することが難しい。マン・レイはカメラを、単に現実を再現する器械ではなく、絵画を描く道具として扱っている。被写体をデフォルメし、非現実的に表象することで、新しい現実を我々に提示しているのではないだろうか。百年近い時が流れた現代においても、我々はマン・レイが生み出した魔力を備える写真に魅了され続けている。

作家紹介

マン・レイ(一八九〇—一九七六)。アメリカ・フィラデルフィアで生まれ。画家、写真家、映画監督。二〇世紀を代表する芸術家の一人。デュシャンらとニューヨーク・ダダを展開する。一九二一年に念願のパリに移住し、シュルレアリスム運動にかかわる。第二次世界大戦禍はアメリカへと避難を余儀なくされたが、戦後再びパリの地を活動拠点とした。レイヨグラフやソラリゼーションの発見など写真家のパイオニアとしてよく知られているが、その活動領域は絵画・オブジェ・彫刻・映画・写真と多岐にわたっている。

[1] マン・レイは頻繁にこの画廊に通った。セザンヌやピカソ、ロートレックらフランス近代絵画を紹介する画廊で、マン・レイもキュビスム風の絵画を描くなど多くの影響を受けた。

[2] この現象については、一八六二年にフランスの科学者サバティエが同じ現象を発見しており、彼の名前にちなんで「サバティエ効果」とも呼ばれる。マン・レイの「ソラリゼーション」と「サバティエ効果」は厳密にはプロセスが違うが、同一視されることが多い。

[3] ドイツ生まれのスイス人画家。女性シュルレアリスト。

参考文献
ニール・ボールドウィン『マン・レイ』鈴木主悦訳、草思社、一九九三年
Arturo Schwarz,*Man Ray:The Rigour of Imagination*,Rizzoli internatoinal publications,inc.,1977

工事通信

現在、当館の周りには要塞のように足場が組まれていますが、中身においても着々と改修作業が進められております。ただ、前回号の改修工事の記事にもある通り、実際には工事後も見た目はほぼ変わりません。そこで、今回はコアな「美博のここがかわる！」ポイントを一つご紹介します。

美博のエントランスは全面ガラス張りですが、こちらにはロールスクリーンがかけられています。今回の工事でこのロールスクリーンが新しくかわります！学芸係のみんなでどの色が良いか検討しました。といっても…ホワイトからホワイト（内側はグレー）への変化のため、言われなければ気づかないかも…。ただ、性能は格段に上がっているはず！前よりも日差しは抑えられるものになっております。

工事明けには、こんなちょっぴり変化がいくつか見られます。みなさんはいくつ気づけるでしょうか。（安本）

今なにしているの？　その２

工事休館中であるが、一般の来場者からは見えない部分の美術博物館の業務は、毎日太陽が昇って沈むように休みなく続いている。その中で自分が取り組んでいる業務の一部をいくつか紹介したい。

ひとつは美術博物館の外で情報発信や教育普及活動を行う「とびだせ！びはく」と題したアウトリーチの展開である。「工事休館中」であることを周知すると共に、当館の収蔵資料を紹介するポスターを制作し、美術博物館のある中央総合公園を中心に各所で掲示している。また館外で展開するワークショップの企画と運営である。三月一日（土）には康生町のNEKKO OKAZAKIで美術家の宮田明日鹿による「出張手芸部３」を開催した。工事休館に関わらず当館は市内の中心から離れた郊外であるため、知らない人に存在を知ってもらい、来館に繋げるには外に出で活動することも必要である。

出張手芸部３にて

もうひとつは館内に保管している資料を守るＩＰＭ（Integrated Pest Management）という取り組みである。当館にある三百年以上前の資料は人の命を超えて子々孫々に守られてきた。それを後世に繋いでゆくことはミュージアムの根幹を成す機能である。奇しくも現在、全国のミュージアムではこれまで資料防虫・防黴で使用してきた薬剤が今後使えなくなることで、今後の資料保存の考え方を変える過渡期を迎えている。ＩＰＭによる保存環境の調査と、それに基づいた日常の点検と清掃等の処置は、もはやミュージアムの新しい日常と言えるだろう。

そして館の工事の内部の調整。収蔵庫や展示室といった学芸員にとって心臓と身体のような箇所への改修という名の手術は、日々静かな怒号が飛び交いながら慎重に進められている。それと最近資料画像データの入ったＨＤＤの故障を発見した人になってしまったことで、新たにＮＡＳ（オンラインＨＤＤ）の導入を行った。これまで画像の出し入れは専用の共有ノートパソコンから共有ポータブルＨＤＤを経由して自席のＰＣで使用していた。在席しながら資料の大型画像ファイルにアクセスできるようになったことは、地味に学芸係の新しい世界の幕開けである。（今泉）

今は毎日の工事対応に追われながら、令和七年度の仕事の準備が中心です。そろそろ、岡崎市の令和七年度予算の概要も公開されているかと思います。

さて、令和七年度の美術博物館の目玉事業は引き続き改修工事。さらに学芸係としては、新収蔵品管理システム導入が一大イベントです。今までアナログで管理していた収蔵品の基本情報や出品予約などをシステムで管理することで、情報の一元化と日常の収蔵品管理業務の効率化を図ります。今までは一子相伝の奥義のごとく受け継がれていた収蔵品に関する情報が、学芸員がいつでも・誰でも参照できるようになります。さらに、登録されたデータを活用して収蔵品検索ページをＷｅｂ公開し、みなさまにもご覧いただけるよう、準備を進める予定です。他館の検索ページを羨ましく思いながら、当館もやっと一歩を踏み出せそうな気配です。

もちろん地方公共団体のシステム調達になるので、「君に決めた！」とはできません。システム選定のため、お役所の契約ルールに則った書類の数々と格闘する日々です。そして過去に入力された収蔵品データの不備に涙しながら、システム移行用に現行のデータを整えるべく、今館内で最もエクセルを触っているのは私だと思います。多分。

当館の人員体制では、担当展覧会を抱えていたらとても手が回らない本業務。休館中に新システムに移行できなければ、次のチャンスは早くて美博築四十年となる十年後…？無事に新システムを導入できるよう、応援のほどよろしくお願いいたします。（酒井）

表紙画像：鬼頭健吾《cartwheel galaxy》2018年、アクリル・グリッター・キャンバス、162.0 × 261.0 cm、当館蔵

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

設備改修工事のため、岡崎市美術博物館は
令和8年6月末（予定）まで休館いたします。

ＨＰ　https://www.city.okazaki.lg.jp/museum

ARCADIA
OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

［岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア］　第102号 2025年3月発行
編集・発行　岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1番地　岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000（代表）